

LifeKeeper for Linux Generic ARK 仕様変更ガイド

初版

目次

1	本ドキュメントの目的	3
2	変更された動作	4
3	v8.0 からのログの出力方法	4
4	記述例	6
5	免責事項	7

改版履歴

2013 年 11 月 6 日 初版

1. 本ドキュメントの目的

LifeKeeper for Linux v8.0 より、ログシステムが LifeKeeper for Linux 独自のバイナリ形式のログから、Linux OS において標準的な syslog 機能を通して行われるようになりました。

本変更に伴い、LifeKeeper for Linux v7 系以前を対象として作成された Generic ARK をご利用のお客様に v8.0 以降におけるログ出力方法の提供を目的としています。

2. 変更された動作

LifeKeeper for Linux v8.0から以下のコマンドを利用し、ログを出力させていた場合、ログに ERROR または、INFO という文字列が追加され出力されます。

- ・ ERROR レベルとして出力されるログ出力方法
 - echo "xxx" > /opt/LifeKeeper/out/log
 - log "xxx"
 - pl "xxx"
 - pt "xxx"
- ・ INFO レベルとして出力されるログ出力方法
 - echo "xxx" >&1
 - echo "xxx" >&2

3. v8.0 からのログの出力方法

LifeKeeper for Linux v8.0 から、Generic ARK でログを出力するためには、logmsg 関数または、plogmsg 関数を利用してください。以下の logmsg 関数および plogmsg 関数は、LifeKeeper より提供される prfuncs というログ出力ツールをスクリプト内で読み込み使用します。

prfuncs は ksh を用いた Generic スクリプトを作成するにあたり、LifeKeeper 専用のログ出力関数を提供します。prfuncs を使用するには、スクリプト内にて以下のファイルを読み込みます。

```
/opt/LifeKeeper/subsys/actions/prfuncs
```

【logmsg 関数】

ログのみへ出力します。

【plogmsg 関数】

ログへの出力のほか、perform_action コマンドや GUI からのリソース起動および、停止操作時のメッセージとしても出力されます。

2つの関数は以下のように使用します。引数と意味や順序はどちらも同じです。引数はすべて指定する必要があります。引数の意味については後述いたします。

```
logmsg <program> <level> <source> <action> <tag> <mid> <message>  
plogmsg <program> <level> <source> <action> <tag> <mid> <message>
```

コマンドでログを出力する場合は、LifeKeeper より提供される lklogmsg コマンドを使用します。

上述の logmsg 関数および plogmsg 関数と同じログ出力を行うためには、以下のように lklogmsg コマンドを実行します。各引数の意味は上述の関数と同一です。

logmsg 関数と同じ出力を行う

```
/opt/LifeKeeper/bin/lklogmsg -p <program> -l <level> -s <source> -a  
<action> -t <tag> -i <mid> -- <message>
```

plogmsg 関数と同じ出力を行う

```
/opt/LifeKeeper/bin/lklogmsg -o -p <program> -l <level> -s <source> -a  
<action> -t <tag> -i <mid> -- <message>
```

各引数の意味は下記の通りです。

program

関数を実行するスクリプトの名前を指定します。

level が LK_DEBUG である場合は本パラメータに指定されたスクリプト名ではなく、必ず "lklogmsg" として出力されます。

level

以下のログレベルを指定します。

LK_NOTIFY, LK_FATAL, LK_ERROR, LK_WARN, LK_TRACE, LK_INFO,
LK_DEBUG

LK_DEBUG は以下のコマンドにより、"debug" フラグが作成されている場合にのみ
ログ出力されます。

- ・フラグ作成

```
# /opt/LifeKeeper/bin/flg_create -f debug
```

- ・フラグ確認

```
# /opt/LifeKeeper/bin/flg_list
```

- ・フラグ削除

```
# /opt/LifeKeeper/bin/flg_remove -f debug
```

source

gen を指定します。

action

リソースの動作を指定します。

例 : restore, remove, recover 等

tag

Generic リソースのタグ名を指定します。

mid

6桁のメッセージ ID を指定します。

Generic スクリプトにて使用可能な範囲は 127000-127999 です。

message

メッセージの本文です。

4. 記述例

以下に lklogmsg コマンドを使用した、記述例を示します。

- ・ 起動を知らせる場合

```
/opt/LifeKeeper/bin/lklogmsg -p GenAPP -l LK_INFO -s gen -a restore -t Gen_APP -i 127001 -- Start application.
```

[出力例]

```
Nov6 17:25:35 host GenAPP[25177]: INFO:gen:restore:Gen_APP:127001:Start application.
```

- ・ 停止を知らせる場合

```
/opt/LifeKeeper/bin/lklogmsg -p GenAPP -l LK_INFO -s gen -a remove -t Gen_APP -i 127002 Stop application.
```

- ・ エラーを知らせる場合

```
/opt/LifeKeeper/bin/lklogmsg -p GenAPP -l LK_ERROR -s gen -a -t Gen_APP -i 127003 Failed to stop application.
```

- ・ 特定のファイルからログメッセージを取得する場合

```
cat /root/error.txt | /opt/LifeKeeper/bin/lklogmsg -l LK_ERROR -s gen -a ERROR -t Gen_APP -i 127101
```

- ・ 特定のコマンドをログメッセージに出力する場合

```
/opt/LifeKeeper/bin/lklogmsg -l LK_ERROR -s gen -a ERROR -t Gen_APP -i 1271002 -c /opt/LifeKeeper/bin/lktest
```

5. 免責事項

- 本書に記載された情報は予告なしに変更、削除される場合があります。最新のものをご確認ください。
- 本書に記載された情報は、全て慎重に作成され、記載されていますが、本書をもって、その妥当性や正確性についていかなる種類の保証もするものではありません。
- 本書に含まれた誤りに起因して、本書の利用者に生じた損害については、サイオステクノロジー株式会社は一切の責任を負うものではありません。
- 第三者による本書の記載事項の変更、削除、ホームページ及び本書等に対する不正なアクセス、その他第三者の行為により本書の利用者に生じた一切の損害について、サイオステクノロジー株式会社は一切の責任を負うものではありません。
- システム障害などの原因によりメールフォームからのお問い合わせが届かず、または延着する場合がありますので、あらかじめご了承ください。お問い合わせの不着及び延着に関し、サイオステクノロジー株式会社は一切の責任を負うものではありません。

【著作権】

本書に記載されているコンテンツ（情報・資料・画像等種類を問わず）に関する知的財産権は、サイオステクノロジー株式会社に帰属します。その全部、一部を問わず、サイオステクノロジー株式会社の許可なく本書を複製、転用、転載、公衆送信、販売、翻案その他の二次利用をすることはいずれも禁止されます。またコンテンツの改変、削除についても一切認められません。

本書では、製品名、ロゴなど、他社が保有する商標もしくは登録商標を使用しています。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

サイオステクノロジー株式会社

住所：〒106-0047

東京都港区南麻布 2 丁目 12-3 サイオスビル

電話：03-6401-5161

FAX：03-6401-5162

URL：<http://www.sios.com>